

【日時】 2008年9月14日(日)～15日(月)

【メンバー】 L矢野、大野 小川

五十沢川本流を遡行するにはやはりまだ力(運)不足。入渓前に沢山の関門があり、まさに本流に入渓を拒まれているかのようだった。力不足は自身がよく分かっていたからこれは仕方がないことなのだと受け止めて、今回は本谷沢を遡行してきた。今は我慢する時として登攀と泳ぎの力をつけ、次に本流に向かう時には下流部から源流まで、可能な限り通しで行きたいと思った。

12日(金)の夜、翌日からの天候不順が予想され、本流遡行計画の見直しを考えつつ五十沢キャンプ場へと向かう。朝になり予報が若干好転し、本日は本谷沢付近までと決めて準備を始める、が、振り向けば小川君の悲痛な面持ち・・・「靴が無い」。ここでベートーヴェン作曲「運命」が流れ、次に坂本九「明日があるさ」ときた。ひらめいたのはワークマンで売っている安全靴「忍」。開店前のワークマン前に車を止めて二度寝し、開店と同時に靴コーナーを物色して忍を手に入れた。これはつま先に保護もついて鬼に金棒じゃないか。再度キャンプ場にて準備をし、右岸の登山道(旧道)を歩いて不動滝が見えるところまで来た、が、後ろから小川君の悲痛な叫び・・・「蜂に刺された」。よく見ると上部にバスケットボール大のスズメバチの巣。6箇所程やられたようですぐ休憩とするが、暫くして小川君は立ち上がり「行きましょう」との力強い言葉。しかし彼の体内では何かが激しく戦っているようで、どう見ても体の状態がおかしい。戻って診てもらおうのが最善と判断し、大和の病院へ行って点滴を打ってもらった。するとあっという間に元気になったようで、気持ちは既に明日の沢へ。タフガイとはこんな人のことを言うのだろうと一人合点した。そして話し合った結果、本谷沢を遡行することとした。

14日(日)朝、左岸の登山道を経て4合目へ。遡行を開始してから間もなく、丁度朝の日差しが眩い頃、石橋が現れた。その不思議さ、美しさは比類ない。本谷沢出合は2段10m程度の滝で、滑っていそうなので念のためロープを引いていく。

すぐ後の圧迫感のないゴルジュでは滝群、岩盤が複雑な形状を成し、一体どうしたらこんな形になるのだろうとあちらこちらを覗いて形作られていく姿を想像する。その後若干滑るが登れる滝が続き、楽しみつつ進むと急にゴルジュが狭って2段15mの滝が現れる。これはおとなしく左から高巻く。僅かの



石橋

距離だがこのゴルジュの雰囲気は容易に寄せ付けられないものを感じさせた。しかしこれは序の口で、さらにいくつか滝を越えていくと想像を絶するゴルジュが待っていた。このゴルジュはまるで異次元空間への入口のようで、形容が難しい。写真でも伝わり難い。間近に行けばまた違う姿を見せてくれたかもしれないが、簡単には近寄れない溪相であった。まず一度見ることをお勧めする。ただ、ここは右からスラブ帯を容易に高巻くことができる。1400m付近で左沢へ入るが、その登攀途中に右沢に大滝が見え、本流からそれた事に気づいてそのまま左沢から右沢の大滝上に巻いて降り立った。



異様なゴルジュ

この大滝は登山大系では4段80mと記されており、下から臨めなかったことを少し後悔した。この辺りで日が傾いてきたことを感じさせる空気になってきたが、ここまでは勿論この先も幕場の当てはないた



め、とりあえず三人が横になれるスペースを見つけて行動終了としたが、そこはとても増水には耐えられそうにない場所である。そして幕営の準備に取り掛かるが、いつもは真っ先に出てくるはずのツェルトが今日は一向に出てこない。恐る恐るツェルトについて聞くと誰も持っていないことが判明した。これは寒い夜になりそうだ。テントマットで風除けを張り、火を燃やせるだけ燃やして朝を迎えることとした。

15日(月)朝も早めに出発し、昨日と同じように多くの滝を僅かな巻きを交えて越え、藪漕ぎもなく、2時間程度で牛ヶ岳山頂に到着した。周囲は生憎ガスに囲まれて視界は無いが、色々ありながらも無事に本谷沢を遡行できたことをお互いに喜び合う。小川君はこれまで踏んだことが無いという巻機山山頂を一人で

往復した後、早々に五十沢登山道(旧道：しっかり刈り払われていた)を経てキャンプ場へ下山した。本谷沢は決して難しいことはなく、多くの滝は登ることができて楽しい沢だが、幕営適地がないことが唯一の問題である。

【行程】 9/14 登山道入口駐車場 (5:15) ~4合目 (7:15) ~本谷沢出合 (9:50) ~4段80m上C1 (16:30)

9・15 C1 (6:10) ~牛ヶ岳 (8:25/9:00) ~4合目 (11:00) ~駐車場 (12:50)

【地図】 六日町、巻機山

